社長メッセージ

日本赤十字社
社長　**近衞　忠煇**

日本赤十字社医学会は、様々な職種からなる約６万人にのぼる職員を会員としており、医療のみならず赤十字が直面するさまざまな課題について議論を交わすことのできる貴重かつユニークな場です。第48回目の総会が本日開催されることを慶び、赤十字のさらなる発展に向けた成果が上がることを期待しています。

昨年３月に発生した東日本大震災の後、私たちは職種の違いを越えて、文字通り全社をあげて救護活動に取り組みました。日本赤十字社の歴史を振り返っても、これほど多くの人々が一つの活動に力を合わせた経験は過去に例がないことでした。私たちの活動は国民から大いに注目され、昨年６月に行った『赤十字運動月間広報効果調査』によれば、東日本大震災に関連した日本赤十字社の活動として、「義援金の受付」と「医療救護班の派遣」の認知度が特に高く、調査対象者の約半数の人が、日本赤十字社への関心・信頼・期待を高めたという結果が出ています。

この６月に来社されたベルギー皇太子ご夫妻からは、「日本赤十字社はなぜ、あれだけ迅速で大規模な活動ができたのか」との御質問がありました。私は「92の病院を全国に持っており、それらを中心に日頃から備えているからです」とお答えしました。その上、そこには、年間にのべ3,000万人もの患者さんが診察や治療を受けに来られます。こうした日常的な地域住民とのつながりが、いざという時に「赤十字に協力しよう」という気持ちを生み出しているのではないでしょうか。

国際救援活動に力を入れてきた先進国の赤十字社の多くは、今、世界的な不況の中で資金調達に行き詰まりを見せています。ODAによる国や援助機関からの補助金が減る一方で、赤十字以外のさまざまな団体が国際救援に参入してきており、財源確保を巡る競争が激しくなっているという事情もあります。そのうえ国民からは、「国内にも困っている人が大勢いるのに、なぜ海外ばかりに目を向けるのか」という疑問も出されています。このような時代の流れから、先進国の赤十字社は改めて、国内活動の重要性に気づかされています。こうした中で、地域に根差した病院を持っている日本赤十字

社は、他の社にはない強みを持っていると改めて認識しているところです。

しかし、救援で実績を残してきた赤十字にこれから期待されるのは、国内的にも国際的にも災害に強い体質づくりに向けた各国赤十字社の能力のアップです。それには災害が多発する地域の国民の健康向上、自立の支援もあれば、救援に当たる各社の災害対応能力の強化も含まれていますが、いづれにしても救援を緊急の救護に限定せず、災害への備えから復興までをシームレスに繋いで行くという発想が求められます。「備え」にも「復興」にも「開発」の視点が必要であり、救援と開発をどう関連づけて取り組むかが、いま問われています。

連盟では、2010年のハイチ地震以来、災害時に発する救援のアピールによって寄せられる救援金のうち、10%を復興に充てることとしていますが、今回の東日本大震災の救援では、日赤も復興支援に深く関わることになりました。

連盟は、救援と開発をつなぐ概念としてResilience——意訳するならば災害への耐性——という言葉を用いており、日赤の医療事業を日頃からの国民の健康維持と強化を通じての「災害に対する体力作り」と「いざという時」に国民の生命と健康を守るための拠点として位置付けるならば、その目的や使命はより明確になるでしょう。

今回の総会では「すべては地域とともに　～今こそ赤十字医療の力を～」というメインテーマが掲げられており、大震災を経験した今だからこそ、赤十字が病院を経営することの意味を議論するのが相応しいのではないでしょうか。

ちなみに、日本赤十字社が長年にわたり支援を続けてきた、ベトナムでのマングローブ林の再生活動は、「災害への耐性」を総合的に高める取り組みの成功例として、連盟から高く評価されています。マングローブは防潮堤や防風林としての役割を担い、燃料や建材として利用され、魚業資源の開発にも貢献しています。防災だけでなく、住民の生活向上といった開発的側面も持っていることが、高い評価を得ている大きな要因でしょう。この活動は、この地域での赤十字サポーターの増加にもつながっています。

日本赤十字社は大きな組織ということもあり、活動がそれぞれの分野ごとに“縦割り”となっている感は否めません。東日本大震災において、赤十字として一体となった取り組みを展開したように、日常的にも“横”の連携を強めていくことが必要なのは言うまでもありません。

赤十字という共通の旗印のもとで、各分野がいかに連携をしながら地域の災害への耐性を強めていくのか。全職員が横断的に参加する日赤医学会が、こうした議論を深め、赤十字の活動の新たな展望を切り拓いて下さることを念願しています。

ごあいさつ

日本赤十字社医学会
理事長　**富田　博樹**
（日本赤十字社事業局長）

本医学会も昭和39年に発足してから今年で48回目の総会を迎えることができました。これもひとえに会員の皆様方のご支援ご協力のおかげであり、心から御礼を申し上げます。

私は山田前事業局長の後を継ぎ、本年４月に事業局長を拝命し、本医学会の理事長に就任いたしました。前職は武蔵野赤十字病院の院長をしており、以前から本医学会にも参加させていただいておりましたが、また別の立場で皆様と関わらせていただくこととなりましたので、今後ともよろしくお願いいたします。

本総会は、日本赤十字社に勤務する様々な職種の職員が全国から一堂に会し、医療及び赤十字事業に関する知識と技術の向上を図ることを目的として毎年開催しております。本年は過去最多となる868に上る演題が集まったと聞き及んでおりますが、多数の会員の参加と様々な分野の演題が予定されており、本医学会に対する皆様の高い参加意識が覗え、今後も本医学会が益々発展していくものと期待しております。

本年度の総会では「すべては地域とともに　～今こそ赤十字医療の力を～」というメインテーマが掲げられております。赤十字病院は、数の上では日本の病院の総数のわずか１％となってしまいますが、一方、救命センター・周産期母子医療センター・災害拠点病院・地域医療支援病院など、診療機能等の各種指定から見てみると、それらは軒並み全国の医療機関の10％程を占めています。そして、皆様の努力とともに、地域の中核病院として、機能の強化・充実についても更なる増強が図られており、各赤十字病院はまさに地域になくてはならない、日本で最大の病院グループであると言うことができます。

2025年にピークを迎える超高齢社会の日本では、国による医療・介護機能の再編が進み、医療を取り巻く環境というものはますます厳しくなっていくでしょう。そうした中で赤十字病院の明日を考える時、グループ力の強化・安定というものは必要不可欠になります。赤十字病院が最大で最強の病院

グループとして発展していくためにも、豊富な人材を有する赤十字の強みを生かし、このような場で切磋琢磨し、相互連携を強めていただければと思います。

また、昨年の総会では、東日本大震災の発生により、災害救護に関する演題が多く見受けられましたが、未曾有の大震災で、想定外という言葉が飛び交う中で、日赤救護班は相互に連携を図り、これまでに例のない最大規模で最長となる息の長い救護活動を展開しました。発災初日に55班、発災５日目には最大77班が展開するなど、全国の赤十字病院のネットワークを最大限に生かし、かつ迅速に被災者の救援に大きな力を発揮しました。

この結果、日赤全体で896班6,492人を派遣し、87,445人の診療に当たりましたが、これは日本全国から派遣された医療救護班約12,000人の半数以上を占めるものとなりました。また、こころのケア要員や介護チーム、福島原発事故に係る放射線対応など、時々刻々と変化する被災地ニーズに対応し、多様で継続的な被災地支援を行うことができたことについて、皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。こうした団結の力を今後想定される首都直下型地震や東海・東南海・南海地震に備え、活動・教訓を共有するためにも、本総会において東日本大震災の総括が出来ればと思っております。

今回の開催地となりました高松赤十字病院は、明治40年日本赤十字社香川支部病院として設立され、現存する日本赤十字社の病院の中では６番目という100年を超える歴史をもつ病院であり、まさにメインテーマに掲げる『地域』とともに成長してきた病院であります。会員の皆様におかれましては、施設や職域を越えた多くの職員が一堂に会す貴重な機会として、他の施設の職員の方々と活発な意見や情報交換を行い、赤十字グループの一員として団結を深めていただきたいと思います。それが今後の皆様、ひいては赤十字の糧になると信じております。

今回の総会の開催にあたりましては、総会会長である高松赤十字病院の笠木　寛治院長をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも本学会の更なる発展のため一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げて挨拶とさせていただきます。

平成24年10月18日

ごあいさつ
「すべては地域とともに　～今こそ赤十字医療の力を～」

第48回日本赤十字社医学会総会
会長　**笠木　寛治**
（高松赤十字病院　院長）

第48回日本赤十字社医学会総会は、中四国ブロック、高松赤十字病院が担当して平成24年10月18日（木）、19日（金）に香川県高松市で開催いたします。

総会のメインテーマは、「すべては地域とともに　～今こそ赤十字医療の力を～」にいたしました。我々日赤医療人は、昨年の東日本大震災において団結して救護活動を行いました。また、緊急時のみならず平時においても、地域住民の健康を守るべく日夜診療に励んでおります。そこで、この学会を、地域医療の充実や地域住民の幸せのために何をすべきかを考える機会として位置付けたいと考えており、日赤医療人としての自覚の再確認や、団結力の更なる高まりに繋がる機会となれば幸いです。

特別講演は、米国在住のコラムニストである　李　啓充　氏に「米国医療の光と影　日本が学ぶべき教訓」と題した講演をお願いしております。教育講演は、京都大学名誉教授で神戸市立医療センター中央市民病院長の　北　徹　氏に「脂質代謝異常症と動脈硬化」の題で講演していただきます。シンポジウムは、「地域連携の光と影」と「医療安全：更なる一歩へ」の２題とし、多くの皆さまによる活発な討論となることを期待しております。

総会前には、讃岐国分寺太鼓保存会によるウエルカムコンサートを開催いたします。全国的にも産出が珍しい“讃岐岩”で造られた楽器「サヌカイト」と和太鼓の独特なコラボレーションをお楽しみいただけるものと思います。また、10月18日（木）に併せて市民参加型のイベント「赤十字フェスタ2012 秋」を開催いたします。

さて、皆さまよりご応募いただいた演題数は、過去最多となる868題となりました。昨年、一昨年からの「看護用具・リハビリ用具の工夫作品展」や「研修医症例発表」、また東日本大震災に関連する演題も多数応募いただき、心より感謝しております。特に「研修医症例発表」は、例年を大きく上

回る46題を受け取りました。教育、研修は病院運営において重要な課題です。その意味で、研修医による発表数が増えたことは誠に喜ばしいことであり、本学会が今後ますます活性化されることを期待したいと思います。

今回、演題数は想定を遥かに超えるものとなりましたが、皆さまにご迷惑をお掛けすることがないよう、中四国ブロックをはじめとする各施設のご協力のもと高松赤十字病院職員一同、誠心誠意、円滑な運営に注力いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、錦秋の四国・高松で全国の日赤医療人の皆さまにお会いできることを心待ちにしております。その折には是非とも腰のある“さぬきうどん”をお召し上がりながら、“うどん県”を十分にお楽しみいただければと思います。